特集：学生の力（パワー）

お茶の水女子大学 LiSA プログラム

胡内　奈都子　　茂出木　理子

1. はじめに

2009年4月、お茶の水女子大学附属図書館のLiSAプログラムは第4期をスタートさせ、現在20名の学生がLiSAとして活動している。これは過去最高人数である。本学のLiSAプログラムは、学生と図書館スタッフの協働による図書館活性化のための活動であり、決められた時間で決められた業務をするアルバイトとは全く別の活動である。

今回、「大学の図書館」からのご依頼を受け、このLiSAプログラムについて、ご紹介させていただく機会をいただいた。

2. LiSAとは

LiSAはリサと読み、正式名称はLibrary Student Assistantである。半年間を1期として、公募により選考された本学の学部生がLiSAとして活動している。公募は、図書館内でのポスター掲示、大学から学生に配信される月1回の連絡メールで広報しているが、毎回、文教育学部、理学部、生活科学部の全学部の全学年から予定定員数を超える応募がある。

これまでの活動期間、人数は次のとおりである。

第1期（試行）　2007.11.12 ～ 2008.3.14
　13名
第2期　2008.4.21 ～ 2008.10.3
　10名（うち、継続6名）
第3期　2008.11.4 ～ 2009.3.13
　13名（うち、継続5名）
第4期　2009.4.20 ～ 2009.9.30
　20名（うち、継続8名）

活動期間中は、各自が自分のスケジュールに合わせて合計50時間分の業務計画を立て、業務をおこなっている。期間終了後には、実施報告書を提出することが義務づけられており、この実施報告書の提出後、学長と館長の連名による「参加証明書」が発行される。ちなみに証明書は「プログラムに参加することで学生として研鑽を積み、図書館の活性化に寄与したことを証する」と記されている。

また、第1期の活動開始当初から、「LiSA活動日誌ブログ」（http://ochadailisa.blog32.fc2.com/）を開設し、LiSAの学生と職員が自由に記事を書いているが、LiSAプログラムをはじめとするお茶の水女子大学附属図書館の

日々の活動の記録ともなっている。

3. LiSA プログラムの図書館への効果

現在の第4期の業務内容は次のようなものである。

Ⅰ．雑誌に関する仕事
　1. 寄贈雑誌に関する業務
Ⅱ．図書に関する仕事
　1. 教員著作コーナーの資料に関する業務
　2. 図書の請求記号データの入力
　3. 学科図書の蔵書点検およびIDラベル貼付
　4. 寄贈図書の入力
　5. 図書の受入業務
　6. 図書の除却作業
Ⅲ．カウンター関係の仕事
　1. 図書装備
　2. 書架整理
　3. カウンター業務
Ⅳ．その他
　1. 8月の蔵書点検

これらの業務は、LiSA を募集するときに各係で毎回検討している。

LiSA の学生が業務をおこなうときには、それぞれの業務を担当する職員が説明をする。ほとんどの業務は説明後、LiSA の学生だけで業務をしてもらっている。例えば、前述のⅡの3は、学科図書室に行って作業をする。初めてのときは職員が一緒に行って説明をするが、2回目以降は LiSA の学生だけが行って作業をする。

業務のやり方だけではなく、その業務の最終的な目標や、目標に至るまでのどの過程の業務なのか、といったことも説明するよう心がけている。前述のⅡの3の場合は、電子的な登録が未完了の蔵書を対象に、図書に押印されている登録番号の書き取りと、それをもとに印刷したバーコードラベルの貼付をお願いしている。この作業は、図書の所在や状態を確認することにもなるので、蔵書点検をしていることになる。また、バーコードラベルを貼った図書から遡及入力を進めているので、その準備でもある。説明ではこのことも伝えるようにしている。

LiSA の学生にお願いする業務には、単調で地道な作業や力仕事も多い。資料の移動もそのひとつである。当館では、昨年度業者に依頼して、紀要の大きな移動をおこなったが、その下準備としてリストにある紀要を運ぶ作業を LiSA の学生に手伝ってもらった。これは一見単純な作業に思えるのだが、対象の紀要が探しにくい、運ぶのは力仕事であるという点で大変な作業だった。このとき作業をした LiSA の学生から LiSA 活動日誌ブログに率直な感想が書き込まれた。それに対して、自分もやってみて大変だった、でも最終的な目標に向けてみんなで進めていこう、という内容のコメントを職員から書き込んだ。このやりとりを通じて、地道な作業や力仕事のときほど最終的な目標を伝える必要があると感じた。

また、職員がこのように心がけることで、自分の仕事を人に説明し、理解してもらい、実際にその仕事をやってもらう、ということの難しさを知った。職員にとっては説明することの訓練にもなっている。その結果、職員の説明能力や指導力が向上するという付加的な効果も現れている。

LiSA の活動の中には、LiSA の学生の声から始まった活動や業務もある。そのひとつである LiSA ミーティングは、LiSA の学生が提案して第1期から開催し続けている。LiSA プログラムでは、基本的に学生一人一人がそれぞれの作業をしているが、LiSA の学生同士で話す機会が欲しいという希望があった。開催日時は LiSA の学生が決めており、職員はミーティングに参加しない。開催後、LiSA 活動日誌ブログで報告されるが、業務の感想にとどまらず、利用者としての図書館に対する希望や、図書館のスタッフとしての考えなども話

しているようである。

このほかにも同じ希望を受けて、LiSA の学生や職員が集まって図書装備をする「タトルの時間」を第3期から開催している。

LiSA の学生は活動期間終了後、実施報告書を提出する。この実施報告書には、学生ならではの視点から率直な意見や感想が綴られていて、職員の側がはっとするようなことや、なるほどと思う指摘がある。また、実施報告書だけではなく、業務中に受ける質問や会話から職員の側が教えられることも多い。

4. LiSA の真の目的

このように、LiSA プログラムは図書館にいくつかの効果をもたらしているが、これらの効果を得るためだけに LiSA プログラムを導入したわけではない。LiSA の募集においても「図書館での業務の体験を通し、幅広い資料の実際に接していただくことによる学習支援に併せて、高い職業意識の育成や利用者としてサポートを受ける側からサポートする側になることによるキャリア意識形成などを目的」とする活動と紹介しているとおり、このプログラムの第一の目的は、学生の自主性、自律性を重んじた学習・教育支援である。

本学では、大学全体で学生のキャリアサポートに力を入れているが、その中で図書館が LiSA プログラムを企画した。

この成果の一例をご紹介したい。LiSA の学生の中には、将来図書館で働くことを希望している学生がいる。図書館職員として働いている人の話を聞きたい、と学生から相談を受けたが、我々が準備を整えるのではなく、学生自身で企画・開催することを後押しすることにした。相談に来た LiSA の学生2人は本学の現代 GP（現代的教育ニーズ取組支援プログラム）の教員のサポートも受けながら準備を進め、2009年1月に2つのイベントを開催した。このイベントについては LiSA 活動日誌ブログ（http://ochadailisa.blog32.fc.com/blog-entry-141.html）でも報告されている。

5. 図書館のサポーター

話が前後するようであるが、LiSA プログラムが誕生した最初のきっかけは、2006年度の新入生オリエンテーションで、当時の羽入図書館長（現在、お茶の水女子大学長）が「新入生のみなさんに、ぜひ図書館のサポーターになっていただきたい」とおっしゃった一言だった。この言葉を聞き、我々は、「ファンではなく、サポーターを作るために、何をしたらよいのか」ということを模索した。その答えのひとつが、2006年度から進めてきた館内改修であり、また、2007年11月にスタートさせた LiSA プログラムである。

館内改修では、ラーニング・コモンズ、キャリアカフェの開設に併せ、「利用者の顔が見えない図書館事務室はあり得ない」という考えから、利用者がよく見える場所に事務室を移転したことがポイントである。そして、職員全員が、常に学生のことを見、そして、自分たちが学生のために何ができるのか、と考えることを徹底した。

前述のとおり、LiSA プログラムの直接的な目的は、①学生へのキャリアサポート、②ルーティンワークの人材確保であるが、目標としたことは、「自分たちの図書館」を一緒になって活性化しようとしてくれる図書館サポーターを得ることであった。サポーターは、現状の良いところも悪いところも共有した上で、どうしたら少しでも図書館が良くなるかということを一緒に考え、実行してくれるパートナーである。学生にとっても、図書館のサポーターになることが自分たちの利益につながるというような、Win-Win な仕組みを作りたいと考えた。

図書館を学習・教育の場として考えたとき、ラーニング・コモンズは、学生が自由に ICT 機器を使うことができる場であり、キャリアカフェは学生が自由にイベントを企画・実行

できる場である。これらの学生にとって自由で居心地の良い場を提供することは、自由であることと傍若無人にすることとは違うということを学生自身が学ぶ場を提供することでもある。そして、LiSA プログラムは、図書館に設けた第3の自由な場であるといえる。つまり、我々は、LiSA プログラムを学生が自由に自発的に活動することを応援する場として位置づけている。

6. おわりに

LiSA プログラムは職員にとっても初めての体験であった。そのため、今年度第4期を迎えたが、毎回新しい活動を取り入れたりして、LiSA プログラムそのものも成長してきている。そのような中で、早くも様々な成果が現れていることはうれしいことである。

LiSA プログラムを通じてさらに図書館のサポーターが増えていくよう、今後も LiSA プログラムを成長させていきたい。

（こうち・なつこ，もでき・りこ／
お茶の水女子大学附属図書館）